

小塩

詞章

登場人物

前シテ・樵翁

後シテ・在原業平の霊

ワキ・都の人

ワキ連・従者

間狂言・大原の里人

ワ・連 **「次第」** 花に映ろふ峯の雲。花に映ろふ峯の雲。かかるや心なるらん。

ワキ これは下京辺に住まひする者にて候。さても大原山の花。今を盛なる由申し候程に。若き人々を伴なひ。只今大原山へと急ぎ候。

ワ・連 面白やいづくはあれど所から。花も都の名にしおへる。

ワキ 大原山の桜花。

ワ・連 今を盛と木綿花(いづばな)の。今を盛と木綿花の。手向の袖も一人に。

色添ふ春の時を得て。神も交はる塵の世の。花や心に任すらん。花や心に任すらん。

シテ **「二声」** 栞して。花を翳(かざ)しの袖ながら。老木の柴と。人や見ん。

年経(ふ)れば齢は老いぬ然(しか)はあれど。花を見れば物思ひも。無しと詠みしも身の上に。今白雪を戴くまで。光に当る春の日の。長閑けき御代の時なれや。散りもせず咲きも残らぬ花盛。咲きも残らぬ花盛。四方の景色も一人に。匂満ち色に添ふ。情の道に誘はるる。老な厭ひそ花心。老な厭ひそ花心。

ワキ さても大原山の花盛。貴賤羣集(きせんくんじゆ)の其中に。殊(こと)

に年長けたる老人の花の枝を翳し。さも華やかに見えたる装。心有りける景色かな。そもいづくより来り給ふぞ。

シテ 思ひ寄らずや貴賤の中に。分きて言葉をかけ給ふは。さも心無き山賤(や

まがつ)の。身にも応ぜぬ花好きぞと。お笑ひあるか人々よ。姿こそ山の鹿(かせぎ)に似たりとも。心は花になさばこそ。ならばならめや心からに。

同音 をかしとこそは御覧すらめ。よしや此の身は埋木(うもれぎ)の朽ち

は果てしなや心の。色も香も知る人ぞ。知らずな問はせ給ひそ。

ワキ あら面白の戯やな。よも真には腹立ち給はじ。いかさま故有る心詞の。奥ゆかしきを語り給へ。

シテ 何と語らん花盛。いふに及ばぬ気色をば。いかかは思ひ給ふらん。

ワキ げにげに妙なる梢の色。映ろふ影も大原や。

シテ 小塩の山の小松が原より。煙る霞の遠山桜。

ワキ 里は軒端の家桜。

シテ 匂ふや窗(まど)の梅も咲き。

ワキ 茜さす日も紅の。

シテ 霞か。

ワキ 雲か。

シテ 八重。

シ・ワ 九重の。

同音 都辺はなべて錦となりにけり。なべて錦となりにけり。桜を折らぬ人

し無き。花衣着にけりな。時も日も月も弥生。合ひに合ふ眺かな。げにや大原や。小塩の山も今日こそは。神代も思い知られけれ。神代も思い知られけれ。

ワキ 面白き人に参り逢ひて候ものかな。いづくまでも同道申し花を眺めう

栞 木の枝を折つて地に立て帰り道の印とすること。ここでは枝を

手折つてとの意。

年経れば齢は老いぬ然はあれど。花を見れば物思ひもなし 古今集藤原良房

春の日の光に当たる我なれど。頭の雪となるぞ詫びしき 古今集文

屋康秀 今日見ずは悔しからまし花盛 咲きも残らず散りもはじ

めず 鞍馬天狗より形こそ深山がくれの朽木なれ。心は花になさばならめや 古今集兼

芸法師 姿こそ山の鹿に似たりとも。心は花になさばならめや 未詳 君ならで誰にか見せん梅の花。色をも香をも知る人ぞ知る

古今集紀友則

大原や小塩の山の小松原。はや木高かれ千代の影見ん 後撰集紀貫之

都辺はなべて錦となりにけり。桜を折らぬ人しなれば 藤

大原妻もこもれり

ずるにて候。また只今口ずさみ給ふ歌は。大原や小塩の山も今日こそは。神代の事も思ひ出づらめ。今所から面白う候。これはさて如何なる人の御詠歌にて候ぞ。

も今日こそは 神代のことも思ひ出づらめ 伊勢物語七十六段

事新しき仰（おおせ）かな。これは此の大原野の行幸に供奉（ぐぶ）し給ひし時。在原の中將業平の御詠歌ぞかし。忝くも後の御身の昔を思ひ出で。神代の事とは詠みしとかや。申すにつけて我ながら。そら恐ろしや天地の。神の御代より人の身の。妹背の道は浅からぬ。

名残小塩の山深み。名残小塩の山深み。上りての代の物語。語るも昔男。あはれ古りぬる身の程。歎きてもかひ無かりけり歎きてもかひぞ無かりける。げに山賤のさしもげに。げに山賤のさしもげに。しばふる人と見ゆるにも。心有りける姿かな。

源氏物語賢木の巻に「このもかのもに怪しきしばふる人ども」

心知らればとても身の。姿に恥ぢぬ花の友に馴れてさらば交らん。交れや交れ老人の。心若木の花の枝。

鶯の笠に縫うてふ梅の花 折りて翳さん老隠

老隠るやと翳さん。翳しの袖を引きひかれ。此面彼面（このもかのも）の陰毎に。貴賤の花見。

るやと 古今集源常

輿車（こしくるま）の。花の長枝を翳し連れて。よろぼひさずらひ。とりどりに廻る盃の。天も花にや酔へるらん。紅埋（うず）む夕霞。陰るふ人の面影。ありと見えつつ失せにけり。ありと見えつつ失せにけり。（中人）

天も花に酔へる 和漢朗詠集菅原道真の詩。この句は「田村」にも見える。

不思議や今の老人は。ただ人ならず見えつるが。さては小塩の神の代の古跡。和光の影に業平の。花に映じて衆生済度の。姿現し給ふぞと。思ひの露もたまさかの。思ひ露もたまさかの。光を見るも花盛。妙な法の道の辺に。猶も奇特を待ち居たり。猶も奇特を待ち居たり。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ 我が身一つは

【二声】月やあらぬ。春や昔の春ならぬ。我が身ぞ旧（もと）の。身も知らじ。不思議やな今までは。立つとも知らぬ花見車の。やごとなき人の御有様。これは如何なる人やらん。

物語四段

げにや及ばぬ雲の上の。花の姿はよも知らじ。ありし神代の物語。思ひ出づるや昔男の。心表すばかりなり。あら有難の御事や。他生の縁は朽ちもせで。契りし人も様々に。思ひぞ出づる。花も今。

今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし 消えずはありとも花と見ましや 伊勢物語十七段

契りし人も様々に。思ひぞ出づる。花も今。

桜翳しの 百敷の大宮人は暇あれや 桜翳して 今日も暮らしつ（新古今集山部赤人）

今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし。今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし。消えずはありと。花と見ましやと詠ぜしに。今はさながら花も雪も。皆白雲の上人（うえびと）の桜。翳しの袖触れて花見車暮るるより。月の花よ待たうよ。

春宵一刻値千金 花有清香月有影 蘇東坡の詩。この一節は能「田村」にも見える

【序】それ春宵一刻値千金。花に清香月に陰。惜しまるべきは唯此時なり。【サシ】思ふこと言はで唯にや止みぬべき。我に等しき人しなれば。とは思へども人知れぬ。心の色はおのづから。思内より言の葉の。露品々に洩れけるぞや。

思ふこといわで唯にや止みぬべき 我に等しき人しなれば 伊勢

【曲（クセ）】春日野の。若紫の摺衣。忍ぶの乱れ。限知られずと詠ぜしに。

き人しなれば 伊勢

陸奥の忍ぶ振摺（もじずり）誰故に乱れ初めにし。我ならなくにと。詠みしも紫の色に染み香に愛でしなり。又は唐衣。着つつ馴れにし妻しあれば。遙々来ぬる旅をしぞ。思ふ心の奥までは。いさ白雲の下り月の。都なれや東山。これも亦東の。果てしなの人の心や。

シテ

武蔵野は。今日はな焼きそ若草の。

同音

妻も籠れり我も亦。籠る心は大原や。小塩に続く通ひ路の。行くへは同じ恋草の。忘れめや今も名は。昔男ぞと人もいふ。

シテ

昔かな。

【序ノ舞】

昔かな。花も所も月も春。

同音

ありし御幸を。

シテ

花も忘れじ。

同音

花も忘れぬ。

シテ

心や小塩の。

山風吹き乱れ散らせや散らせ。散り迷ふ木の下ながらまどろめば。桜に結べる夢か現か世人定めよ。夢か現か世人定めよ。寝てか覚めてか春の夜の月。曙の花にや残るらん。

物語百二十四段

春日野の若紫の摺ころ

も 忍の乱れ限り知ら

れず 伊勢物語初段

陸奥の忍ぶ振摺誰故

に 乱れ初めにし我

ならなくに 古今集

河原左大臣

又は唐衣着つつ馴れ

にし妻しあれば

遙々来ぬる旅をしぞ

思ふ 伊勢物語九段

武蔵野は今日はな焼

きそ若草の 妻もこ

もれり妻もこもれり

伊勢物語十二段

夢か現か 君や来し

我やゆきけむおもほ

えず 夢かうつつか

夢かさめてか かき

くらす心の闇にまど

ひにき 夢かうつつ

か今宵さだめよ 伊

勢物語六十九段